チベットの『メーガドゥータ』

根本　裕史

The *Meghadūta* in Tibet

Nemoto Hiroshi

Abstract：The *Meghadūta*（"The Cloud Messenger"）is a lyrical piece on love and sorrow written by Kālidāsa（4–5th cent.）. It was translated into Tibetan under the title of *Sprin gyi pho nya* by Byang chub rtse mo（1303–80）et al. The Tibetan version of the *Meghadūta* occupies a unique place in the history of Tibetan literature. Although the Tibetan *Meghadūta* was included in the *sgra mdo* section of the *bstan 'gyur*, the tradition of lecturing and commenting on the text was never established during the classical period. This was probably because of two main reasons. First, the Tibetan translation of the text prepared by Byang chub rtse mo et al. lacks accuracy in many places, making it highly difficult to comprehend without appropriate knowledge of the original Sanskrit. Secondly, given that the main subject of the *Meghadūta* is love and grief of separation from one's beloved wife, it is natural to assume that the text has not been closely studied in the Tibetan monastic tradition. Only after the Chinese and Hindi translations of the *Meghadūta* became available in the twentieth century, did the text get reevaluated by modern Tibetan scholars such as A lags dor zhi gdong drug snyems blo（1935–）, Rak ra bkras mthong thub bstan chos dar（1925–）, and Nor brang o rgyan（1933–）, who were active outside monasteries. These modern commentators provide their own interpretations of the *Meghadūta* without adhering to the literal meaning of the words in the Tibetan translation, and attempt to present a new reading of the text, which, however, could benefit from careful consideration of the original Sanskrit text.

关键词：迦梨陀娑，云使，梵文学，藏译，古典诗
Keywords：Kālidāsa, *Meghadūta*, Sanskrit literature, Tibetan translation, classical poetry

1　はじめに

カーリダーサ（Kālidāsa：4－5世紀）の叙情詩『メーガドゥータ［雲の使い］』（*Meghadūta*）はインドのサンスクリット文学の最高傑作の一つであり、また、古典期から現代までのチベット文学史にささやかではあるが確かな影響を及ぼした作品である。

『メーガドゥータ』は古典期にチベット語に訳された唯一のカーリダーサ作品である。仏教とは無縁の世俗文学作品でありながら、チベット人学僧によって翻訳され、大蔵経テンギュルに収録されたのは本作品のみである。『メーガドゥータ』のチベット語版である『ティン・キ・ポニャ』（*Sprin gyi pho nya*）は14世紀に成立した。その後600年近くにわたって註釈や講義の伝統が確立することはなかったが、『メーガドゥータ』からの影響を受けた若干の作品が生み出された。おそらくその間『メーガドゥータ』がチベットの学者達の間で本格的に研究されることはなかったであろう。

チベットで『メーガドゥータ』が再注目されるようになったのは20世紀後半のことである。チベット語による註釈書が1990年代後半以降に相次いで出版され、註釈付きのチベット語版『メーガドゥータ』が洋装本の形で容易に入手可能となる。これにより難解で知られるチベット語版『メーガドゥータ』はようやく日の目を浴び、チベットの読者に受け入れられるようになった。

詩聖カーリダーサの高度な技巧が散りばめられた『メーガドゥータ』をチベット語に翻訳した14世紀の翻訳官達の労苦は多大なものであったと思われる。チベット語版『メーガドゥータ』の訳文は晦渋であり、そこには様々な興味深い問題がある。その訳文と原文を丹念に比較対照し、チベットの学者達による『メーガドゥータ』理解を考察することは、サンスクリット文化からの影響の下に成立したチベット古典文学の特色を明らかにすることにつながると期待される。

本稿はチベット語版『メーガドゥータ』の成立、翻訳の特色、受容史について考察することを通じて「チベットのメーガドゥータ」の実像に迫るものである。これにより、チベットにおけるサンスクリット文化受容史の一端を明らかにすることを目的としている。

2　チベット語版『メーガドゥータ』の成立

『メーガドゥータ』の著者カーリダーサは4世紀後半から5世紀初めにかけて、グプタ王朝のチャンドラグプタ2世（Candragupta：在位375–414）とその息子クマーラグプタ（Kumāragupta：在位414–455）の治世下に、おそらくアヴァンティ国（Avanti）の都ウッジャイニー（Ujjayinī）に住み、宮廷詩人として活躍した人物である[1]。バラモンの家に生まれるも孤児となり、牛飼いに育てられた無知蒙昧な少年をバラモンの学者ヴァラルチ（Vararuci）が見出し、大学者と偽って王宮に迎え入れたこと、やがて牛飼いとしての本性を現したために欺瞞は露見するが、この少年は女神カーリーの恩寵により論理学・文法学・詩作の知識を授けられて真の学者となり、カーリダーサ（「カーリーの従僕」）の名で知られる詩人となったこと、そして、酒場の女によって殺害されるも、大自在天の力により復活を遂げたことなどをはじめとする伝説は、サキャ派のマルトン・チューギェル（Dmar ston chos rgyal：13世紀）が詳らかに伝える所である[2]。また、チョナン派ターラナータ（Tā ra nā tha: 1575–1634）はカーリダーサの著作として、『メーガドゥータ』とはじめとする使者物語八部作（sprin gyi pho nya la sogs pa pho nya brgyad）および『クマーラサンバヴァ［軍神クマーラの誕生］』をはじめとする大美文詩作品（gzhon nu ’byung ba la sogs pa’i snyan dngags kyi bstan bcos chen po）が多数存在したことを伝えている[3]。ターラナータはカーリダーサが異教徒（phyi rol pa）であり仏教徒ではないことをはっきりと認識している。

カーリダーサ作品の内、古典期にチベット語に翻訳されたのは『メーガドゥータ』のみである[4]。翻訳に携わったのはカシュミール出身のインド人学者スマナシュリー（Sumanaśrī）および二人のチベット人翻訳官—チャンチュプ・ツェモ（Byang chub rtse mo: 1303–80）とナムカ・サンポ（Nam mkha’ bzang po：

---

1 辻（1973：41f.）、Rgya ye bkra bho（2015：164ff.）を参照。

2 カーリダーサの伝説は『サキャ・レクシェ』（*Sa skya legs bshad*）第1章第3詩節に対するマルトゥン註に登場する（*Legs bshad ’grel pa* 101.17 ff.; cf. Davenport 2000: 28f.）。また、それと同様の記述がターラナータの『インド仏教史』にも現れる（*Rgya gar chos ’byung* 100.7ff.）。

3 *Rgya gar chos ’byung* 102.19ff. を参照。

4 20世紀になるとゲンドゥン・チューペル（Dge ’dun chos ’phel: 1903–51）とトンドゥプギャ（Don grub rgyal: 1953–85）が、それぞれカーリダーサの戯曲『シャクンタラー』のチベット語訳を試みたが、現在残されているのはその部分訳のみである。2009年にオギェン（’O rgyan）が『シャクンタラー』中国語訳からの重訳を完成して出版している。

14世紀）である。翻訳年は1340年と推定される[5]。チベット語版『メーガドゥータ』の奥書には次のような記載がある。

> 大詩人カーリダーサがお作りになった『メーガドゥータ』がここに完成する。智慧、悲愍、自制、確信、喜捨などの優れた無量の功徳で飾られた大領主ナムカ・テンパのご命令により、カシュミールのパンディタにして大詩人であるスマナシュリー、校訂主任の翻訳官である多聞の比丘チャンチュプ・ツェモ、および翻訳官の一員である聖典論理学者ナムカ・サンポが吉祥サキャ大僧院にて翻訳し、校訂を施した上、完成させたものである[6]。

この記述によれば、『メーガドゥータ』がチベット語に翻訳されたのは、ナムカ・テンパという領主の依頼によるものであった。チャンチュプ・ツェモとナムカ・サンポはいずれも14世紀に活躍したサキャ派の著名な翻訳官である。この二人の内、ナムカ・サンポは若き日のツォンカパ・ロサンタクパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa: 1357–1419）に詩論書『カーヴィアーダルシャ』(*Kāvyādarśa*)を教えたことでも知られる[7]。

上の奥書の後には翻訳者による結びの詩節が添えられている。

> そのお方が清らかなお考えから〔我々を〕本書に向かうように促し、必要な条件を整えて下さり、また、我々が努力を払ってあらゆる福徳を成就したことにより、〔かのお方が〕輪廻を超えて〔仏の〕三身を獲得しますように。
>
> 北方の領主の素晴らしいお言葉を受けて、カシュミールの大パンディタと共に、比丘チャンチュプ・ツェモがこの詩作品をチベット語に翻訳した[8]。

チベット仏教僧が施主に向けて送るものとしては至極ありふれた祈願文であ

---

[5] Rgya ye bkra bho（2015：171）を参照。

[6] MD D 351a4ff.: snyan ngag mkhan chen po nag mo'i khol kyis mdzad pa'i sprin gyi pho nya rdzogs so || || blo gros dang snying rje dang | brtul ba dang des pa dang | gtong ba la sogs pa'i yon tan phul du phyung ba dpag tu med pas spras pa'i dpon chen nam mkha' brtan pa'i bka' lung gis | kha che'i paṇḍi ta snyan ngag mkhan chen po su ma na shrī dang | zhu chen gyi lo tsā ba mang du thos pa'i dge slong byang chub rtse mo dang | lo tsā bar gtogs pa lung rigs smra ba nam mkha' bzang pos dpal sa skya'i gtsug lag khang chen por bsgyur cing zhus te gtan la phab pa ||

[7] *Dad pa'i 'jug ngogs* 17b5f. を参照。

る。この文章は翻訳者の真意を明らかにするものではない。比丘戒を守る敬虔な学僧チャンチュプ・ツェモは、別離の悲しみや高まる望郷の念を綴った世俗文学を翻訳することによって本当に「福徳を成就した」と信じているのであろうか。チャンチュプ・ツェモとナムカ・サンポの作品にかける思いがいかなるものであったかは、彼ら自身が残した翻訳の行間から推測するより他ない。

ともあれ、1340年に成立したチベット語訳が、世界で最初の『メーガドゥータ』の翻訳ということになる。『メーガドゥータ』の詩節数は伝本によって異なるが、チベット語訳は全117詩節を収録している。1詩脚17音節のマンダークラーンター（mandākrāntā）韻律で構成される全ての詩節が1詩脚19音節のチベット語の韻文で翻訳される。

木版本はチベット大蔵経テンギュル（ナルタン版、北京版、デルゲ版、チョーネ版、金写版など）の声明部（sgra mdo）に見出され、洋装本は1957年に人民出版社より出版されている[9]。この洋装本は金克木（1921–2000）によるサンスクリット原典からの中国語訳（全115詩節を訳出）とチャンチュプ・ツェモ等によるチベット語訳を左右に対照したものであり、現代のチベットにおける『メーガドゥータ』再評価のきっかけを作った。

3　チベット語版『メーガドゥータ』第一詩節

ここで『メーガドゥータ』の第一詩節とチベット語訳を見てみよう。冒頭に置かれたこの詩節でカーリダーサは場面設定を提示している。

kaścit kāntāvirahaguruṇā svādhikārapramattaḥ
śāpenāstaṃgamitamahimā varṣabhogyeṇa bhartuḥ |
yakṣaś cakre janakatanayāsnānapuṇyodakeṣu
snigdhacchāyātaruṣu vasatiṃ rāmagiryāśrameṣu || (MD 1)

あるヤクシャは自身の職務を怠ったがために、愛妻と別離しなければならないという厳しい、一年にわたって耐えなければならない主人の呪いにより、すっかり威力を失い、ジャナカの娘（シーター姫）が沐浴した聖水の

[8] MD D 351a6f.: gang zhig thugs dgongs rnam par dag pa yis || ’di la bskul zhing mthun rkyen bsgrubs pa dang || bdag cag ’bad las bsod nams gang bsgrubs pas || ’khor ba las rgal sku gsum thob par shog || byang gi bdag po’i gsung bzang las || snyan ngag ’di ni bod skad du || kha che paṇ chen dang lhan cig || dge slong byang chub rtse mos bsgyur ||

[9] Dor zhi 2003: 119を参照。なお、同書は2006年にラサの西蔵人民出版社より再版されている。

ある、密生し影をなす樹々に覆われたラーマギリ山の庵に住まいを定めた。

『メーガドゥータ』の主人公はクベーラ神に仕える無名のヤクシャ（夜叉、半神の一種）である。彼は自らの職務を怠った罰として都アラカー（Alakā）を追放され、愛する妻のもとを離れて、中部インドのラーマギリ山の庵で一年間を過ごす運命となる。続く詩節ではヤクシャが眼前に現れた雨雲に語りかけ、遠く離れた妻への音信を託し、北方の都アラカーまでの道案内を行ない、アラカーにある自身の邸宅と、孤独のために悲しみ嘆く妻の様子を想像して描写した後、妻への音信を綴るさまが語られる。

チャンチュプ・ツェモ等による第一詩節のチベット語訳は以下の通りである。Dor zhi（2003：17）に従ってチベット文を提示し、あわせて試訳を与える。

rje bo khros pa’i shin tu lci ba’i bka’ lung dag gis gzi brjid nyams par byas gyur cing ||

gnod sbyin ’ga’ zhig la ni rang nyid bag med dbang gyur mdzes ma spangs la lo yi bar ||
yid ’ong skyed byed bu mo’i khrus byas bsod nams chu bo rnams dang shin tu rab mdzes pa’i ||
rab bzang ljon shing grib ma dang ldan rā ma’i ri bor song la spyod pas gnas par gyis ||
［試訳］怒れる主人の非常に厳しい命令（bka’ lung）のゆえに威力を失い、あるヤクシャは（? gnod sbyin ’ga’ zhig la ni）自ら不注意にかまけて美しい妻（mdzes ma）と別離し（spangs）、一年にわたって、魅惑的な（yid ’ong）ジャナカの娘（シーター姫）が沐浴した聖水があり、とても優美で（shin tu rab mdzes pa’i）、美しく（rab bzang）影をなす樹々に覆われたラーマギリ山に赴き、労役をして（? spyod pas）暮らした。

このチベット語訳はサンスクリット原文の大意を捉えてはいるものの、非常に難解であると言わざるを得ない。語順通りに理解するならば、ヤクシャは主人の厳しい命令のせいで自身の威力を失い、自らの不注意のゆえに妻と別離したことになるが、これでは意味をなさない。ヤクシャは不注意のゆえに職務を怠り、その結果、主人クベーラの怒りを買い、妻との別離を命じられたことにより、失意に暮れ、威力を失ったのである。

また、このチベット語訳において問題があると思われるのは第二詩脚に現れる la 助辞である。文の主語となるべき gnod sbyin ’ga’ zhig（「あるヤクシャ」）の後に、〈行為の向かう対象〉や〈行為が起こる場〉などを表示する la 助辞が置

かれるため、主述関係が不明瞭となっている。試訳では仮に「あるヤクシャは」としたが、少なくとも筆者にはここでの la 助辞の働きを合理的に説明することができない[10]。

さらに、このチベット語訳には原文と対応しない箇所が多くある。第一詩脚の bka' lung は「命令」（敬語）の意味であるが、もしサンスクリットの śāpa（「呪い」）を正確に訳すならば dmod pa または smod pa とすべきであろう。bka' lung にかかる形容詞 shin tu lci ba'i（「非常に厳しい」「非常に重い」）に相当する語はサンスクリット原文にはない。第三詩脚の yid 'ong（「魅惑的な」）は skyed byed bu mo（「ジャナカの娘」）にかかる修飾語であると思われるが、これもサンスクリット原文にはない言葉である。第三詩脚の末尾の shin tu rab mdzes pa'i（「とても優美な」）と第四詩脚の rab bzang（「美しい」）は共に ljon shing（「樹」）にかかる修飾語であると思われるが、原文にあるのは snigdha（「美しい」「密生する」）[11]のみである。第四詩脚の song（「赴いた」）はサンスクリットの相当語を欠く。同じく第四詩脚の spyod pas はおそらく āśrama に相当するのであろう。āśrama は仙人が苦行（√śram）を行なう場、すなわち「隠遁所」「庵」を意味するが、チベット語 spyod pa にそのような意味があるとは思われない。spyod pas gnas par gyis は「労役をして暮らした」という意味であろうか。第四詩脚の解釈については検討の余地がある。

なお、14世紀に活躍したアーンドラ地方出身の註釈家マッリナータ（Mallinātha）によれば、原文に現れる āśrameṣu（所格・複数・男性形）という複数表現は、半狂乱の状態（unmādāvasthā）にあるヤクシャが一箇所にとどまらず、複数の庵を転々としたことを示唆するが[12]、チベット語訳にそのような解釈は全く反映されていない。14世紀当時、マッリナータ註は同時代のチベットに伝わっていなかったのであろう。

以上より、チャンチュプ・ツェモ等によるチベット語訳には破格の表現や原

---

[10] あるいは、la 助辞は単に音節数を整える目的で置かれた虚辞に過ぎないのであろうか。しかし、韻文において主語の後に置かれる la が虚辞としての機能を持ち得ることを筆者は寡聞にして知らない。

[11] 第一詩節の snigdha をヴァッラバデーヴァ（Vallabhadeva）は aparuṣa（「穏やかな」「荒々しくない」）の意味で解釈し、マッリナータ（Mallinātha）は sāndra（「密生する」「生い茂る」）の意味で解釈する。

[12] S on MD 1: atra raso vipralambhākhyaḥ śṛṅgāraḥ | tatrāpy unmādāvasthā | ata evaikatrānavasthānaṃ sūcitam āśrameṣv ity bahuvacanena |（「ここでのラサ［情調］は別離と呼ばれる恋情であり、その中でも特に半狂乱の状態である。まさにこのことから、āśrameṣu という複数表現によって、一箇所にとどまらないことが示唆されている」）

文との乖離が目立つことが明らかとなった。翻訳と校訂の作業にあたって細心の注意が払われていたのではないことが推測される。

4　古典期におけるチベット語版『メーガドゥータ』の受容

チベット語版『メーガドゥータ』が成立してから20世紀に至るまで、チベット人の手による同作品の註釈書は書かれなかったか、もしくは書かれたとしても広く普及することはなかった。一説によれば、ポトン・チョクレー・ナムギェル（Bo dong phyogs las rnam rgyal: 1376–1451）は「メーガドゥータ割註」（sprin gyi pho nya'i mchan 'grel）を著したとされるが、彼の全集にそれに該当する作品は見出されない[13]。現在確認することができるチベット人の手による註釈書はいずれも20世紀以降に書かれたものである。

古典期において『メーガドゥータ』註釈の伝統が確立することはなかったが、『メーガドゥータ』に影響されて書かれた文学作品が残されている。それは『カーヴィアーダルシャ』の註釈者として知られるリンプン・ガワン・ジクテン・ワンチュク・タクパ（Rin spungs ngag dbang 'jig rten dbang phyug grags pa: 1542–1595?）の『書簡・持明者の使者』（*Zhu 'phrin rig 'dzin pho nya*）である[14]。これは作者が自身の亡父リンプン・ガワン・ナムギェル（Rin spungs ngag dbang rnam rgyal）――シャンバラ王カルキの化身とされる――のために書いた作品である。作者は自身の息子を使者に任命し、人間世界での任務を終えて北方のシャンバラ国へと戻った父への書簡を託す。そして、リンプン宮殿から北方シャンバラ国までの道案内をし、最後に父に向かって没落の危機に瀕するリンプン家の現状を伝え、父王の再臨を請願する。『メーガドゥータ』が男女の別離の悲しみや望郷の念を表現しているのに対し、『書簡・持明者の使者』は当時の政治腐敗に対する嫌悪感や、父王の再来に対する期待といった感情を表している。このように扱っている主題は異なるが、この作品の構成が『メーガドゥータ』を模倣したものであることは明らかである。

インドでは『メーガドゥータ』成立以後、これを模倣する使者文学作品が生み出された。例えばジャンブカヴィ（Jambukavi）の『チャンドラドゥータ［月の使者］』（*Candradūta*）やドーイー（Dhoyī）の『パヴァナドゥータ［風の使

---

[13] Rgya ye bkra bho 2015: 195を参照。
[14] Rgya ye bkra bho 2015: 186ff. を参照。

者]』(*Pavanadūta*)などである。『書簡・持明者の使者』はチベットが生み出した使者文学である。この作品の存在はチベット古典文学における『メーガドゥータ』の確かな影響を物語るものである[15]。

5　現代におけるチベット語版『メーガドゥータ』再発見

チベット語版『メーガドゥータ』が広く読まれるようになったのは、中国語訳やヒンディー語訳などを通じて、チベット人の読者が『メーガドゥータ』の作品世界に近づき易くなった20世紀以降のことである。以下では20世紀に作成された三つの註釈書に基づき、現代のチベット人による『メーガドゥータ』再評価について考察する。

5.1　アラク・トルシ・トンドゥク・ニェムロによる註釈

現代アムドを代表する学者アラク・トルシ・トンドゥク・ニェムロ(A lags dor zhi gdong drug snyems blo: 1935–)は『メーガドゥータ』に魅せられた人物の一人である。アラク・トルシは1987年に著した註釈『クムダ蓮華の月光』(*Kun da'i zla zer*)の序文で『メーガドゥータ』の文学的価値を高く評価した上で、この作品がチベットでは700年間にわたって「地中に埋もれた宝」(sa 'og tu sbas pa'i nor bu)のように日の目を浴びなかったことを嘆いている。また、その理由として、この作品の主題が男女間の愛の悲しみであるゆえに僧院で学ぶことが憚られ、その結果として僧院から民間に広がることもなかったこと、また、訳文が難解である上に翻訳官自身が註釈を残さず、講義の伝統も確立しなかったため、多くのチベットの読者には内容理解が困難であったことを挙げている[16]。アラク・トルシは1957年に出版された金克木による中国語訳を参照することにより、チャンチュプ・ツェモ等による旧来のチベット語訳の不備を克服し、独自の註釈を施している。

アラク・トルシはチャンチュプ・ツェモ等の翻訳を「直訳が過ぎるゆえに表現が著しく難解である」(thad 'gyur byed che bas tshig ha cang go dka')[17]と評する。

---

[15] さらに、20世紀になるとギーテン・ロサン・パルデン(Sgis steng blo bzang dpal ldan: 1881–1944)が『使者ションヌ・トンドゥプ』(*Pho nya gzhon nu don grub*)と題する使者文学作品を著している。この作品には『書簡・持明者の使い』からの影響も見受けられる(Rgya ye bkra bho 2015: 189ff.)。

[16] Dor zhi 2003: 1ff. を参照。

[17] Dor zhi 2003: 119を参照。

『クムダ蓮華の月光』を見ると、アラク・トルシはその「直訳」的な旧訳の構文や語彙に引きずられることなく、自由に自己の解釈を展開していることが分かる。先に見た第一詩節に対する註釈は以下の通りである（チベット語版『メーガドゥータ』本文の対応箇所を太字で示す）。

> **gnod sbyin** te stobs ’byor can gyi rje bo gnod sbyin ku be ra’i mdzod gnyer zhig | **rang nyid bag med** kyi **dbang** du song nas las la mi sgrim par rje bo’i dgongs pa dang ’gal zhing | **rje bo** de **khros** nas khrims kyis yul spyugs byas te **mdzes** sdug dga’ **ma dang bral** zhing | **yid ’ong skyed byed bu mo** ste mdzes ma sī tas **khrus byas** myong ba’am ’thung na tshe ring nad sel ’dod don ’grub pa sogs kyi nus pa ’byung ba’i **bsod nams chu bo** dang | **ljon shing** mang po’i **grib** bsil **dang ldan** pa’i **rā ma’i ri bor song** nas **lo** gcig tu btson ma byas nas sdod dgos byung zhing | khrims chad dang mdzes sdug dga’ ma dang bral ba’i gdung bas lus kyi **gzi brjid nyams par gyur** to ||（*Kun da’i zla zer* 18.14ff.）
>
> **ヤクシャ**、すなわち、武勇と財力を具える主人クベーラの財宝管理係の者が、**自ら不注意にかまけて**職務を怠り、主人の命令に背いてしまった。すると、その**主人**の**怒り**を買い、法に従って国外追放とされ、**美しい愛妻と別離**した。そして、**魅力的**であり、**ジャナカ王の娘**シーター姫**が沐浴した**ことがある、〔それによって〕体を洗うならば、もしくは〔それを〕口に含むならば長寿となり、病を退け、願い事が成就するなどといった効能がある**聖水**と、生い茂る**樹々**の涼やかな**影**がかかった**ラーマギリ山に赴き**、**一年**にわたって服役して過ごさねばならなくなった。そして、刑罰と、美しく魅力的な愛妻との別離がもたらす悲しみのせいで、身体の**威力を失った**。

アラク・トルシはチャンチュプ・ツェモ等によるチベット語訳に対して逐語的な註釈を施しているのではない。彼は旧訳を尊重しつつも、語順や表現を大幅に変更し、チベット語として意味の通る文章を新たに構成している。アラク・トルシの註釈からは、自らの職務を怠って主人の怒りを買ったヤクシャが単身での国外追放を命じられ、ラーマギリ山での服役に従事し、刑罰の重みと妻との別離の悲しみのために威力を失ったことが明瞭に理解される。また、旧訳に見られた gnod sbyin ’ga’ zhig la ni の la 助辞はここでは用いられず、ヤクシャが文の主語であることが読み手に伝わるようになっている。アラク・トル

シが独自の手法でチベット語版『メーガドゥータ』を読み解き、原文との乖離を解消しようとしていることは明らかである。

5.2　ラクラ・テントン・トゥプテン・チュータルによる註釈

20世紀の奇才ゲンドゥン・チューペル（Dge ’dun chos ’phel: 1903–1951）の弟子であるラクラ・テントン・トゥプテン・チュータル（Rak ra bkras mthong thub bstan chos dar: 1925–）は、アラク・トルシとは異なった方法で、現代チベットにおける『メーガドゥータ』再評価に貢献している。インドに亡命してサンスクリットとヒンディー語を学んだ彼は、シュリー・ケーダーラナータ・シャルマ（Śrī Kedāranātha Śarma）によるヒンディー語の註釈『サウダーミニー［雷光］』（*Saudāminī*, Tib. *Glog phreng ma*）をチベット語に訳している。

ラクラ・テントンは自身がチベット語に翻訳した『サウダーミニー』をチャンチュプ・ツェモ等による旧訳と対照させ、必要に応じて旧訳に改訂を加えた自身の翻訳（rang ’gyur）を提示している。序文によると、この労作は作者が南アメリカの西部地方ウスパッヤタル（? lho a mi ri ka’i yul gyi nub phyogs uspayyatar［sic］）に居住していた頃に着手され、1997年にスイスにて完成されたものである[18]。出版年は不明であるが、ダラムサラのリクラム研究所（Rigs lam slob gnyer khang）より出版された刊本の中に収録されている。

興味深いことに、ラクラ・テントンはチャンチュプ・ツェモ等による第一詩節の翻訳を「意訳」（don ’gyur）と捉え、アラク・トルシとは正反対の評価をそこに与えている。ラクラ・テントンが旧訳の第一詩節を「意訳」と見なす根拠は、shin tu lci ba（「非常に厳しい」「非常に重い」）や shin tu rab mdzes pa（「とても優美な」）など原文にはない表現が見られるからである[19]。彼は『サウダーミニー』に依拠して第一詩節を再解釈し、「原文通り」（rtsa ba’i tshig zin ltar）の新たな翻訳を提示している。

lan cig gnod sbyin gang zhig rang gi bgyi ba bag med dbang gyur pas ||
rje bo khros pa’i dmod pas mdzes ma dang ’bral gzi byin rgud bzhin du ||
skyed byed bu mos khrus byas gtsang ba’i chu dang ljon shing grib bzang can ||

---

[18] Rak ra bkras mthong（n.d.）30f. を参照。

[19] Rak ra bkras mthong（n.d.）33を参照。なお、ラクラ・テントンは第三詩脚の bsod nams chu bo（Skt. puṇyodaka）をデルゲ版に従って bsod nams che ba と読んでいる。当然ながら、これを bsod nams che ba と読む場合、サンスクリットとの対応を認めることはできないはずである。

rā ma'i ri bo'i gnas su lo yi bar du gdung ba rab ljid myong ||（*Glog phreng ma* 33.15f.）ひとたび（lan cig）あるヤクシャは自身の職務〔に対する〕不注意にかまけてしまったため、怒れる主人（rje bo khros pa）の呪いにより美しい妻と別離し、威力を失いながら、ジャナカ王の娘が沐浴をした清水（gtsang ba'i chu）があり、美しく影をなす樹々に覆われたラーマギリ山の庵にて、一年にわたって非常に重い労役に服した（gdung ba rab ljid myong）。

チャンチュプ・ツェモ等による翻訳と比較して、はるかに読み易い訳文となっている。しかしながら、依然として問題点はある。第一詩節の lan cig（「ひとたび」）や第二詩節の rje bo khros pa（「怒れる主人」）に相当する語はサンスクリット原文にない。また、このチベット文の主要素を抽出すると「あるヤクシャは非常に重い労役に服した」（gnod sbyin gang zhig gdung ba rab ljid myong）となるが、原文に従えば「あるヤクシャは住まいを定めた」（kaścid yakṣaś cakre vasatim）とあるべきである。特にサンスクリット原文の主動詞 cakre が訳されていないのは致命的な過失である。おそらくこれらの欠点はサンスクリット原文を参照しなかったことに起因するのであろう。

5.3　ノルタン・オギェンによる註釈

現代チベット人によって書かれた最新の註釈はノルタン・オギェン（Nor brang o rgyan: 1933–）の『稀有なる饗宴』（*Ngo mtshar dga' ston*）である。同書は2004年に北京の中国蔵学出版社より出版された。ノルタン・オギェンはチャンチュプ・ツェモ等によるチベット語版『メーガドゥータ』の各詩節について詳細な解説を与えるだけでなく、各19音節の 4 詩脚からなる模倣詩（'dra rtsom）を作り、さらに、同じ内容について各11音節および各 9 音節で改作した二種類の自作の詩を並べている。

第一詩節に関してノルタン・オギェンは、あるヤクシャが不注意にかまけて自らの職務を怠った罰として一年間の追放を命じられ、愛する妻のもとを離れて南方のラーマギリ山で労役に服することになったという物語を正確に記述している。そして、ラーマギリ山に関連するラーマ王子とシーター姫の故事について簡潔に紹介し、風光明媚な山のたたずまいについて描写した後、以下のような説明を与えている。

gnod sbyin de ni dga' ba'i longs spyod de dag gis yid mgu bar ma gyur pa ste | rang yul nas bskrad de btson pa'i gnas skabs rang dbang dang bral ba'i sdug bsngal

myangs pa dang | lhag par mdzes sdug yid du ’ongs shing | mdza’ brtse’i ’ching zhags dam pos lhan du bcings pa’i rang gi dga’ ma dang bral ba’i gdung ba mi bzad pas kun nas mnar bas lus kyi gzi brjid dag kyang nyams par gyur to ||（*Ngo mtshar dga’ ston* 5.18ff.）

そのヤクシャはそれらの喜びをもたらす享受対象によって心満たされることはなかった。そして、自国から追放されて懲役に服し、一時的に自由を奪われるという苦しみを味わい、特に美しく魅力的な、愛情の固い絆で一緒に結ばれた自分の愛妻との別離という耐え難い苦しみに苛まれたので、身体の威力も失われてしまった。

このようにノルタン・オギェンの註釈は、ヤクシャが懲役と別離の苦しみに苛まれ、身体の威力を失ったという点に重きを置くものとなっている。アラク・トルシの解釈が大きな影響を与えていることは疑い得ない。ノルタン・オギェンは自らの第一詩節の理解に立脚して次のような模倣詩を創作している。

rje bo’i sri zhu bsgrub la mi brtson bag med spyad pas btsan brjid rje bo’i bka’ lung gis ||
mdzes ma spangs te lo yi bar du rā ma’i ri bor song zhig gnas dbyung gnod sbyin de ||
yid ’ong skyed byed si tā’i lus bkrus bsod nams chab dang rab mdzes ljon shing dang ’grogs kyang ||
dga’ ma’i reg pa ma thob sems kyi gdung ba rab rgyas lus kyi gzi brjid kun nas nyams ||
（*Ngo mtshar dga’ ston* 6.2ff.）

主人への奉仕を行なうことに励まず、不注意な行動をしたために、厳格な主人の命令で「妻と別居して一年間ラーマギリ山に行け（song zhig）」〔といわれて〕追放されたそのヤクシャは、魅力をかもしだす（yid ’ong skyed byed）シーター姫が身体を清めた聖水やとても美しい樹々と共にあったが、愛する妻に触れることが叶わず、心の苦しみが高まるあまり、身体の威力が完全に失われてしまった。

この詩には、愛する妻のもとを離れて労役に励むヤクシャの精神的苦痛が、優美なラーマギリ山の情景と対比をなすようにして鮮明に描かれている。なお、第三詩脚の yid ’ong skyed byed si tā は「魅力をかもしだすシーター姫」を意味すると思われるが、チベット語版『メーガドゥータ』の yid ’ong skyed byed bu mo（「魅力的なジャナカ王の娘」）の原意からは大きく隔たっていること

に注意せねばならない。もし仮に作者がサンスクリットの知識を有しており、サンスクリットの janaka に相当するチベット語 skyed byed が「生み出すもの」ではなく、固有名詞で「ジャナカ王」を意味することを知っていたならば、このような意味の変更は生じなかったであろう。

6　結論

カーリダーサの『メーガドゥータ』は古典期にチベット人学僧によって翻訳され、大蔵経テンギュルに収録された唯一の世俗文学作品である。しかし、チャンチュプ・ツェモ等による訳文は極めて難解であり、サンスクリット原文との乖離が目立つものとなっている。また、チベットでは『メーガドゥータ』註釈の伝統が確立しなかった。そのため、この作品は600年近くにわたって日の目を浴びることはなく、若干の使者文学作品にその影響が見られるのみであった。チベット語版『メーガドゥータ』が再評価されるのは、『メーガドゥータ』の中国語訳やヒンディー語訳がチベット人学者の目に触れるようになった20世紀以後のことである。興味深いことに、『メーガドゥータ』に対する註釈を残した三人の現代チベット人学者達は共に旧訳を尊重しつつも、その不自然な語順や不可解な助辞の使用を受け入れず、各自が得た理解に基づく自由な解釈を展開している。従来のチベットにはない新たな作品解釈を提示した三者の試みは高く評価されるべきであるが、彼らの理解がサンスクリット原典に基づくものであったならば、チベットの読者にとってより有益であったことであろう。サンスクリット原典に基づく正確な『メーガドゥータ』チベット語訳の作成こそ、今後なされるべき課題である。

略号表

［インド撰述文献］

MD	*Meghadūta*（Kālidāsa）: *Maghadūta of Kālidāsa*. Ed. G. R. Nandargikar. Delhi: Bharatiya Book Corporation. 1998.
MD D	*Meghadūta*（Kālidāsa）: Tibetan Sde dge ed. *Sgra mdo*. Se. Tohoku No. 4302.
S	*Saṁjīvinī*（Mallinātha）: See MD.

［チベット撰述文献］

Kun da'i zla zer — *Snyan ngag sprin gyi pho nya'i 'grel ba kun da'i zla zer*（Dor zhi gdong drug snyems blo）: See Dor zhi 2003.

Glog phreng ma — *Sprin gyi pho nya'i 'grel pa glog phreng ma*（Rak ra bkra mthong thub bstan chos dar）: See Rak ra bkra mthong（n.d.）.

Rgya gar chos 'byung — *Dam pa'i chos rin po che 'phags pa'i yul du ji ltar dar ba'i tshul gsal bar ston pa dgos 'dod kun 'byung*（Tā ra nā tha）. In *Rgya gar chos 'byung*. Chengdu: Si khron mi rigs dpe skrun khang. 1986.

Ngo mtshar dga' ston — *Sprin gyi pho na'i 'grel pa ngo mtshar dga' ston*（Nor brang o rgyan）: See Nor brang o rgyan 2004.

Dad pa'i 'jug ngogs — *Rje btsun bla ma tsong kha pa chen po'i ngo mtshar rmad du byung ba'i rnam pat thar pa dad pa'i 'jug ngogs*（Mkhas grub rje dge legs dpal bzang po）: Zhol ed. Ka. Tohoku No. 5259.

Sa legs 'grel pa — *Legs par bshad pa rin po che'i gter zhes bya ba'i 'grel pa*（Dmar ston chos rgyal）. In *Legs par bshad pa rin po che'i gter dang 'grel pa*（pp. 92–209）. Lhasa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khangs. 1982.

参考文献

［藏文］

Rgya ye bkra bho（2015）. *Rgya gar 'phags pa'i yul gyi rig gnas bod gangs can gyi rtsom rig dang ji ltar 'brel ba'i tshul la dpyad pa dpyod ldan yid kyi dga' ston*. Beijing: Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang.

Dor zhi gdong drug snyems blo（2003）. *Snyan ngag sprin gyi pho nya'i 'grel ba kun da'i zla zer*. Lanzhou: Kan su'i mi rigs dpe skrun khang.

Nor brang o rgyan（2004）. *Sprin gyi pho na'i 'grel pa ngo mtshar dga' ston*. Beijing: Krun go'i bod rig pa dpe skrun khang.

Rak ra bkra mthong thub bstan chos dar（n.d.）. *Gnas brgyad kyi 'grel pa tha snyad rig pa'i thi gu dang sprin gyi pho nya'i 'grel pa glog phreng ma*. Dharamsala: Dha sa rigs lam slob gnyer khang.

［日文］
辻直四郎（1973）.『サンスクリット文学史』東京：岩波書店。

［欧文］
Davenport 2000. *Ordinary Wisdom, Sakya Pandita's Treasury of Good Advice*. Boston: Wisdom Publications.

根本　裕史（ねもと　ひろし）
広島大学大学院文学研究科

岩尾一史・池田 巧（編）
『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』
京都大学人文科学研究所　2018年 3 月刊